

---

# 守りたい人

アルフォンス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

守りたい人

### 【Nコード】

N2454A

### 【作者名】

アルフォンス

### 【あらすじ】

三蔵一行はある街につき、いつも通りに買い物をしていた。だが、その街のカフェで三蔵は、幼馴染の孤空流と再会。そんな二人の、子供時代の記憶の話。

## 第一章

込み合った街の大通りに、三蔵一行は買い物に来ていた。

「にくまんだあぁ！」

悟空が眼を輝かせながら、にくまんの売っている店へと近づこうとした瞬間、ハリセンが飛んできた。

「いでっ！」

ハリセンは見事、悟空の頭に直撃した。悟浄と八戒はやれやれという、顔をしていた。

「この、バカ猿が！」

「何すんだよ、三蔵！」

「うるせーえ！」

と、その時。どこからか、ピアノの音色が聞こえてきた。

三蔵はその音色を、何処かで聞いたことがあった。守りたい人がいた。光明三蔵法師と……

それから、あの言葉を思い出した。

“ 街のカフェで、12時だ。じゃあな！”

三蔵は角を曲がった。三蔵の行動に、悟空と悟浄と八戒が、驚いたが、すぐさまその後を追った。

一軒のカフェの前に来た。カフェのテラスでは、ピアノを引いている女性がいた。三蔵はその女性を見た途端、記憶を思い出した。

光明三蔵法師と同じくらいに守りたかった人・孤空流

三蔵の様子に気づいたのか、女性がピアノを引く手を止め、三蔵に笑いかけた。

「久ぶりだな、江流」

男口調は前からのことだったが、彼女自体に驚いた三蔵は、彼女の名前を呼んだ。

「孤空流」

三蔵達が泊まる宿にお邪魔して、孤空流は三蔵と昔の思い出を浸っていた。

「誰なんでしょうね？」

「三蔵に、あんな美人の知り合いがいるなんてな。悟浄、がっかりー！」

「でも、三蔵と同じくらいキレーだった。つか、悟浄。キモイからヤメロ！」

「悟空の、テ・レ・ヤ・さん」

「キモ！メツチャ超キモイ！」

「んだと、この猿！」

「んだとっこの、エロ河童！ゴキ河童！カツパ巻！」

「ああ？」

「はいはい。止めましょう。三蔵が怒りますよ？」

「あれから、十年経ったか」

三蔵は何も答えない。ただ、視線を孤空流に向けたままだ。

「大きくなっただな〜江流」

「このこと、わかってたのか？」

不意に三蔵が口を開いた。以外な質問に、孤空流は笑みをみせた。

「いや。そんな気がしてただけだ」

「あんな確実にあたるわけがねえ」

「見えたんだよ。お前が三蔵法師になって、聖天経文を探に旅立つのを。そして、ここで出会うことを。師匠が死ぬ前の姿を見て、その光景が頭に浮かんだんだ。ただ、それだけのことだ」

「お前は、寺を降りてから何をしていた？」

「追ってくる死神から、逃げてた」

「死神？」

「そう。妖怪を倒す武器では倒せないものだ」

三蔵と孤空流は、それから話をした。今までのこと、昔のことなどを話した。

## 第一章（後書き）

一回、最遊記で書いてみたかったんです。

## 第二章

揚子江下流・金山寺

江流はいつも通り、両手に竹箒を持って、外を掃除していた。その時、孤空流が江流を呼んだ。

「おい、江流！」

「何だ、孤空流」

「来いよ。旨そうなりんごが木になってるんだ」

「りんご？」

「ああ。だから、お前も来い！」

孤空流は江流の腕をを掴み、りんごの木がある場所へと走っていった。

江流は、自分の父親であり、師である光明三蔵法師しか認めていなかったのだが、孤空流はそれと同じくらいに信用していた。

捨て子であった、江流を光明三蔵法師が拾ってくれたのが幸いだっ

た。

「お前もって、他に誰かいんのかよ」

「朱瑛と師匠がいる」

「は？」

「いいだろ？」

「つか、説法は？」

「サボりだとき。ついたぞ」

「でか」

「おっ。やっと来たか！」

「どけ」

江流は自分に歩みよってきた朱瑛に冷たい言葉を言い、光明三蔵法師のもとにいった。

「んだよ、テメエは！人がせつかく、待ってやったのによお！」

「お師匠様、説法サボって何、やってんすか」

「いいじゃあ、ないですか。人間たまには、息抜きが必要ですよ、江流？」

「それはそうですね……ドワアアア！！」

「いいじゃんかよ。息抜きぐれ」

江流の肩を抱く感じで孤空流がいった。前から、孤空流は加減をいうのだが、江流には別のようだ。

「ま、いいか」



「それより、木、登ろうぜ」

「お前が取ればいいだろう」

「何言つてのだよ。ほら、早く来い！」

「チエツ」

「俺、木、登ったことねーからな」

「あー。大丈夫、大丈夫。ほら、俺におぶさればいいだろう？」

「だったら、ま……」

「ごちゃごちゃ言っていないで、行くぞ！」

孤空流は江流を自分の背に乗せたまま、太いリンゴの木の枝にジャンプして掴んだ。

そして、枝に両腕の力でよじ登った。

「ほら、登れた」

「登れたんじゃないくて、登らせたの間違いだろ」

「気にすんな！」

## 第二章（後書き）

幼き頃の話です。

### 第三章

江流は、今日の出来事を振り返っていた。だが、また、いつもの会話が耳に入ってくる。

「川流れの江流だぜ」

「生まれてすぐ、川に流された分際で、生意気にも三蔵様の愛弟子気取りとはな」

「いくら武術も法力も優れているとはいえ、ただの童じゃねエか。仏道に帰依してもいなくせに、法名を授かるそうだぜ」

「三蔵様も育て子には甘いということか」

(聞こえてるっつーの)

「修行僧というよりは、お稚児さんってな、風体だけどなア」

「くくく……まっただくだ!!」

「ウオオリヤ!」

「いててて!!?」

「孤空流! 貴様、女に分際で!」

「てめーら、まあーた好き勝手に江流の悪口言いやがって!」  
「おんどリヤー!! 次、言った奴は殺す!」

孤空流はそういうと、銃を僧達に突きつけた。僧達は一瞬たじろいだ。

孤空流は江流の悪口を言った僧達に足蹴をくらわせて、そう言った。

「いててて!!??」

僧達の悲鳴が今一度聞こえた。今度は朱瑛が僧達の一人の耳を引っ掴んでこう、言った。

「ろくに働かんと、なアに、こんな所で駄弁ってんだあ?お前等」

「師範代!!」

「そんなに活力あり余ってんなら、境内の掃除任しちまおうかなー  
ー。ん~~~~?」

「オラオラ、さっさと持ち場に戻りやがれ!!サボリ野郎は、飯抜きだぞ」

「そーだぞ、クソ野郎共!!とつと戻りやがれ!」

「ひーーーー」

「うわあ」

朱瑛と孤空流が僧達を足蹴にしながら持ち場へと戻した。

江流はその様子を呆れた顔で見ている。

ひと騒動終わると、江流が手すりにもたれかかりながら、二人に声

をかけた。

「相変わらずだな、お前等」

「お前もじゃん、江流」

と、孤空流が言った。

「最高僧〃三蔵法師〃の愛弟子な上、こんなちっこいナリして、大人の蹴散らす程の豪傑つつつてか。孤空流、お前もだよ……」

「三蔵の称号を貰うのは江流だぞ」

「はあ？」

「見えるんだよ。江流が師匠の部屋で三蔵の称号を貰って……その後は、知らん！」

「んだそりゃ〜」

「つか、他の奴等が弱すぎるんだよ。カスみたいに」

「しかも、その態度ときた」

「ここに入られんのも、あと少しか……」

「孤空流、何言ってたんだ？」

朱瑛が孤空流に聞いた。だが、江流は何も言わない。

孤空流はニツと笑い、いつも通りの口調で答えた。

「冗談だよ。んなことねーって！朱瑛は騙されやすい奴だな」

「この、クソガキ！」

（孤空流の言ったことが本当なら、俺は三蔵になるのか？それに、あと少して、なんなんだ？）

江流は孤空流の言ったことを考えていた。

前から、孤空流の言ったことは当たっていた。未来が読めるかのよ  
うに……

それから数日後、光明三蔵法師が亡くなる一日前に、孤空流は金山  
寺を下りた。

江流も光明三蔵法師の仇と経文を取り返すべく、寺を下りたのだっ  
た。

### 第三章（後書き）

感想下さい！

お願いします！！

## 第四章

「行くのか」

「ああ。じゃーな！」

孤空流が三蔵に向かつて、軽く手を上げた。

幼い頃の話しをしたあと、孤空流は行く場所があると言い、三蔵に別れを告げたのだ。

前のように言わず、そのまま三蔵の元を離れ、人込みの中へと消えていった。

それが、孤空流の最後の言葉だった。

ジープが風邪をひいたため、3日間この街に滞在することとなった。

梧浄が買いだしに出ている間、八戒はジープの看病をしている。悟空はお菓子を食べつくしていた。三蔵は新聞を読んでいた。

慌しく、梧浄が扉を開けて、中に入って来た。

「どうしたんです、梧浄？」

「街の人から聞いた話しだけだよお、三蔵、孤空流が死んだらしいぞ！」

「なんだと……」

「マジかよ！なんで！」

「知らねーけど、妖怪でも人間でもない奴が殺したらしいぜ！」

「なんだよ、それ！」

三蔵は昨日のことを思い出した。孤空流が金山寺を降りた後、死神から逃げていることを。

「ひでえ」

悟空がそう、呟いた。



孤空流は、森の中で横たわっていた。正確に言えば、一本の木にもたれかかって死んでいた。

木々の間から月の光が差込、孤空流の顔を照らした。

「笑ってやがる」

三蔵達は、孤空流の墓を、その森に作った。

三蔵は森を出る前に、振り返った。

月明かりに照らされている墓を見ると、そこには死んだはずの孤空流がいた。

三蔵を見て、微笑み、囁くように言った。

“ありがとう”

三蔵は笑みをこぼすと、そのまま森を去っていった……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2454a/>

---

守りたい人

2010年10月21日23時59分発行